

# Eureka IX

六年制通信 No.6 令和3年5月21日(金)号

## 決めてしまう

気になって仕方がない。観なければいいのですが、ついうっかりテレビをつけてしまうと流れ出る言葉が気になってくるのですね。別に細かくチェックしているわけではないのですが、醜悪な音声が耳に入ってくると気分が悪くなります。民法の若手タレントたちの学級会みたいな番組はともかく、NHKなら少しはましかとニュースを観ても登場するゲストが「ら抜き言葉」や「〇〇させて頂く」ばかり口にすると、げんなりしてしまうのです。この間「〇〇をごらんいただけますでしょうか」と女子アナが絶叫していましたが、何かもう、こっちがおかしいのかと思ってしまいます。これ、「でしょうか」の部分は「です」の推量に疑問の「か」をつけたものですからもとになった「ごらんいただけますです」という表現を認めていることになりすね。

「いただけますです」て何ですの。丁寧に言おうとしているのですが、結果醜い日本語になっています。私はこういう表現に出会うとリハビリをしたくなります。そのリハビリに使うのが阿川弘之さんのエッセイです。皆さんにもお勧めします。上質の日本語と抑制のきいたユーモアが耳に入った醜悪な日本語を忘れさせてくれます。もっとも、こんな文章が書きたいものだという思いを抑えられなくてちょっと苦しくなるのですが…。阿川さんも若手の小説を読んでイライラするらしいのですが、そうするとリハビリと称して内田百閒のエッセイを読むと言っておられます。この夏目漱石門下の『百鬼園隨筆』は君たちには少し読みにくいかもしれませんが、トライしてみるのもいいでしょう。

阿川さんには、このように、精神安定剤として大変お世話になっているのですが、お嬢さんの、といっても私より七つ年上なのですが、阿川佐和子さんの番組も楽しみにしていました。もう終わってしまったようですが、土曜日の朝の「サワコの朝」は多彩なゲストに佐和子さんの上手なインタビューが楽しかった。勉強にもなりましたよ。土曜の朝から一人感心しながら観てました。野村萬斎さんが父親（人間国宝の野村万作）と息子、つまり三代で出演した回がありましたが、このときもいい話を聴きましたね。野村家の男子は代々狂言師になるよう運命づけられているのですね。歌舞伎界と同じで逃れる道はない、と。しかも万作さんが非常に厳しい。現在、孫には信じられないくらい優しいらしいのですが、ま、それは仕方がない。とにかく自分には厳しかった。何も楽しくない。特に青春時代は音楽に凝って、狂言の方は、叱られるから嫌々やっているに過ぎなかった。歌舞伎でも狂言でも、芸事は例えば指先の位置や角度に至るまで、非常に細かな決まりごとがあるのですね。その理屈、なぜそのよ

うに足を運ばなければならないのか、なぜ顔はこの角度でなければいけないのか、それらを納得する前に体で覚えることが大事とされ、修行をさせられるわけです。これは辛いですね。そもそも野村家に生まれたばかりにどうしてやりたくもない狂言をしなければならぬのか。そこに悩みはあっても答えはないわけです。留学と称して海外へ逃げたこともあったらしい。その若い悩みをどのように克服したのかという話になったとき、萬齋さんは二つ理由を挙げていました。一つは、狂言そのものに魅力があったこと。これは理解できます。もう一つ、決心したから。これが一番大きかったと。ん？、と思ったのですが、音楽は好きだったがミュージシャンになるのではなくて、自分は狂言師になると決心した。結局狂言が好きだと自覚したわけです。そうすると当然悩みはなくなった、と。そりゃまあ、そうでしょうけど…。私が感心したのはそのあとです。決意する前と後で何がどう変わったのかを萬齋さんは語ったのですが、これが劇的に変化したというのです。稽古がです。やらされている稽古から自発的な稽古に変わった、言葉ではそれだけかもしれませんが、こうも違うかというほど違う。師匠である父の一挙手一投足を見逃さない。師匠の言葉を聞き洩らさない。自分から、できるようになるまで反復する。それらを自発的に行った時、芸事がどれほど進むかを体感したのです。これ、以前通信に書きましたが **must** から **will** への変化と同じです。いったん **will** になったとたん何もかも劇的に変化します。しなければいけない (**must**) から自分の意志で行う (**will**)、そう心を切り替えるチャンスは誰にでもあります。萬齋さんの話を聴いてそう思いました。

### 今週のおすすめ

・北川悦吏子 『オレンジデイズ』 (角川書店)

聴力を失ったバイオリニストと彼女を愛した青年を中心に描かれる青春群像です。

オレンジ色の夕日に向かって、5人は並んだ。

「(じゃ、私は……正直でいられますように)」

沙絵が祈った。

「(強いいられますように)」

權が祈った。

「(やさしくいられますように)」

啓太は真剣に祈っている。

「(人の気持ちがわかる人でいられますように)」

茜はやさしい表情で祈っている。

翔平は權にこれでいいんだっけ？とちょっと手話のやり方を聞いてから、祈った。

「(大事な人を守りきれますように)」

余韻のある、祈るような手話だった。

5人は祈りを終えて、はしゃいだ。

權はそれぞれの姿を見ながら、胸が熱くなった。

(本文 292 ページより)

BGMは ミスチル の *Sign* でした…。